

あとがき

私のインターカルチュラル・パフォーマンス研究のはじまりは、一九九〇年代からのシェイクスピア演劇における他者や異邦人の表象研究——とくに女性、ユダヤ人、新世界の原住民、ムア人等——と、初期ヴァージニア植民地言説をはじめとする旅行文学研究であった。二〇〇一年にバルセロナで開催された第七回世界シェイクスピア学会（五年ごとの開催）は旅行文学セミナーに参加予定であったのだが、同年四月に筑波大学に移籍し、多忙をきわめたせいで参加を断念した。覚悟の上とはいえ、往復五時間——二〇〇五年八月のつくばエクスプレス開通後は往復四時間——の遠距離通勤をおこなないながら、まったく新たな環境におかれて、膨大な旅行文学の文献を渉猟する研究活動は中止せざるをえなくなった。ロンドンの倉庫に残っていたという一九世紀を代表する女性旅行家イザベラ・バードの最後の一組の全集を入手したものの、ほとんど読まずに書架に放置せざるをえなくなった。

東京の大学では非常勤講師として英文学の講義をおこなないながら、筑波大学では、国際総合学類で世界中からの多数の留学生も履修する異文化コミュニケーションの講義を英語でおこない、大学院人文社会科学研究所・文芸言語専攻総合文学領域では多数の主にアジア（韓国、中国、台湾、インド、トルコ、極東ロシアほか）からの留学生の日本文学・文化研究や比較文学研究の指導に関わるようになった。この新しい環境の中で、私自身がシェイクスピアのテキストや演劇に、文化学やコミュニケーション学をとり入れた、新たなアプローチをおこなうようになっていた。旅行文学の研究者から、いつの間にか自分自身が旅行者や異邦人ようになっていたともいえる。ともあれ、一〇年ほどの試行錯誤をへて、気がついてみると、「世界シェイクスピア上演をおした異文化理解教育」という新しい研究領域（平成二三―二五年度科学研究費補助金交付、(基盤(C)、研究代表者/浜名)

を曲がりなりにも開拓していた。今後さらに研究をつづける予定だが、今回、一応の成果を問える段階によりやくたどりつけたので、上梓することにした。

本書を執筆するために、国内外で多数の方々のお世話になった。とりわけすぐ目に浮かぶのは、首都ブダペストから国境付近のジュラヘ向かう列車の中で一致団結して私を目的の駅で降ろしてくれた親切なハンガリーの皆さん、また、電子メールと携帯電話を駆使して、コルカタからブダガーヤへの旅をまるで妖精のように支援してくれた、筑波大学大学院のインド人留学生ラージさんと友人のプーナムさんとラチータさん。本書を完成するために申請した二〇一一年四月から七月までのサブティカルを認めてくださった筑波大学大学院人文社会科学研究科に感謝する。『まちがいの狂言』『赤鬼』『The Bee』の写真の掲載に関して尽力してくださった河合祥一郎氏、舞台写真の入手に関して助言してくださった小林かおり氏に心からお礼を申し上げます。お名前はあげないが、私の研究を応援してくれたその他の友人、知人の皆様に厚くお礼を申し上げます。また母に感謝する。

本書のもとになっている論文の大半とフィールドワークの報告は、それぞれ私が研究代表者を務めた次の二つの科研プロジェクトの成果である。平成一六―一八年度科学研究費補助金交付、研究課題「シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築」(基盤(C))と、平成一九―二一年度科学研究費補助金交付、研究課題「シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンス／相互理解促進モデル」(基盤(C)) (ホームページ <http://www.emihamaana.com>)。日本学術振興会にお礼を申し上げます。

幸いにして、本書は筑波大学出版会から出版していただけることになった。貴重な意見をくださった筑波大学出版会の編集委員、同出版会の安田百合さん、丸善プラネットの担当者の皆様に深謝申し上げます。

二〇二二年八月吉日

浜名 恵美

